

# 9世紀バグダードのガレノス研究：フナイン・ブン・イスハーク 『ガレノス著作の翻訳についての書簡』翻訳 (2)<sup>1</sup>

矢口直英\*

## 解題

本稿はフナイン・ブン・イスハーク (Ḥunayn ibn Ishāq, 873年没)<sup>2</sup> 著『[著者の] 知る限りガレノスの著作のうち翻訳されたものと翻訳されていない幾つかのものについての、アリー・ブン・ヤフヤーへの書簡』 (*Risāla ilā ‘Alī ibn Yahyā fī dhikr mā turjima min kutub Jālīnūs bi-‘ilmi-hi wa-ba‘d mā lam yutarjam*, 以下『書簡』) の翻訳である。前回訳出した範囲では、古代末期アレクサンドリアでの医学教育において必修とされていた著作が挙げられていた。今回はそれに続く解剖学的著作の説明から、薬品や処方に関する著作の一部までを訳出する。本翻訳は Bergsträsser 版に基づき、同校訂者の修正を加えた本文 (以下底本) から作成した<sup>3</sup>。

## 翻訳

21. 『解剖の手法について』 (*Fī ‘Ilāj al-tashrīh*) [*De Anatomicis administrationibus*, II 215-731<sup>4</sup>; Sezgin, 98, no. 21; Ullmann, 54, no. 78]<sup>5</sup>

この著作は十五巻で作られた。彼は第一巻では両手にある筋肉と靭帯を、第二巻では両足にある筋肉と靭帯を、第三巻では両手と両足にある神経と

---

\* 専修大学文学部兼任講師

血管を、第四巻では頬、唇、下顎、頭、首、両肩を動かす筋肉を、第五巻では胸の筋肉、下腹部、腰部、背骨を説明した。第六巻では栄養の道具、つまり胃、腸、肝臓、脾臓、腎臓、膀胱、これらに類する他のものを、第七巻と第八巻では呼吸の道具を説明した。第七巻では動物が死んだ後および生きている間に、心臓、肺、脈打つ血管〔動脈〕の解剖において見られることを説明した。第八巻では胸の全体の解剖において見られることを説明した。彼は第九巻の全てを脳および脊髄の解剖の説明に充てた。第十巻では両目、舌、食道、これらの器官に繋がっているものを説明した。第十一巻では喉頭、ギリシア文字のラームつまり「Λ」に似た骨〔舌骨〕、それに繋がっているもの、これらの場所に来る神経を説明した。第十二巻では生殖の器官の解剖を、第十三巻では脈打つ血管と脈打たない血管〔静脈〕の解剖を、第十四巻では脳から生える神経の解剖を、第十五巻では脊髄から生える神経の解剖を説明した。

この著作をアイユブ・ルハーウィー (Ayyūb al-Ruhāwī)<sup>6</sup>がジブリール・ブン・ブフティーフシューウ (Jibrīl ibn Bukhtīshū)<sup>7</sup>のためにシリア語に翻訳した。私は最近それをユーハンナー・ブン・マーサワイヒ (Yūhannā ibn Māsawayh)<sup>8</sup>のために、正しさに極めて配慮して改善した。

22. 『マリノスの「解剖について」要約』 (*Fī Ikhtīṣār kitāb Mārīnus fī al-Tashrīḥ*) [Sezgin, 132, no. 130]

彼はこの著作を四巻で作ったと述べている。これまで私はこれを見たことがなく、これを見たか、これの在処を知っていると言う人を聞いたことがない。ガレノスは『目録』[1]として知られる著作で、この著作の中に彼が要約したマリノスの〔著作の〕巻数と、それぞれの巻の内容を伝えている<sup>9</sup>。

23. 『リュコスの「解剖について」要約』 (*Fī Ikhtīṣār kitāb Lūqus fī al-*

*Tashrīh*)

彼はこの著作を二巻で作ったと述べている。この著作についての話は先のもの [22] と同様である。私はこれを見たことがなく、その痕跡を知らない。

24. 『解剖に関する相違について』 (*Fī-mā waqa‘a min al-ikhtilāf fī al-tashrīh*) [Sezgin, 133, no. 132]

この著作は二巻で作られた。これにおける彼の目的は、解剖の書物に起こっている彼以前の解剖学者たちの間にある相違について、どのようなものが言葉だけの「違い」であるか、どのようなものが意味に起こるか、その原因が何かを説明することである。

この著作をアイユーブ・ルハーウィーが翻訳した。私はその改善に苦勞したので、ユーハンナー・ブン・マーサワイヒのためにシリア語に「改めて」翻訳し、大変よく校閲できた。またこれをフバイシュ (Hubaysh)<sup>10</sup>がムハンマド・ブン・ムーサー (Muḥammad ibn Mūsā)<sup>11</sup>のためにアラビア語に翻訳した。

25. 『死んだ動物の解剖について』 (*Fī Tashrīh al-ḥayawān al-mayyit*) [Sezgin, 100, no. 22; Ullmann, 53, no. 74]

この著作は一巻で作られた。ここで彼は死んだ動物の解剖から知られることがどのようなことであるのかを説明している。

これをアイユーブが翻訳し、私は先の著作 [24] と共にシリア語に改めて翻訳した。またフバイシュがムハンマド・ブン・ムーサーのためにアラビア語に翻訳した。

26. 『生きている動物の解剖について』 (*Fī Tashrīh al-ḥayawān al-ḥayy*) [Sezgin, 100, no. 23; Ullmann, 54, no. 75]

この著作は二巻で作られた。これにおける彼の目的は、生きている動物の解剖から知られることがどのようなことであるのかを説明することである。

この著作もまたアイユブ・ルハーウィーが翻訳し、私が先の諸著作と共にシリア語に改めて翻訳した。またフバイシュがムハンマド・ブン・ムーサーのためにアラビア語に翻訳した。

27. 『ヒポクラテスの解剖知識について』 (*Fī 'Ilm Buqrāṭ bi-tashrīḥ*) [Sezgin, 133, no. 133; Ullmann, 54, no. 76]

この著作は五巻で作られた。彼はこれをボエトゥス (Boethus) のために年齢が若い頃を書いた。これにおける彼の目的は、ヒポクラテスが解剖の知識においても有能であったと説明することである。このために彼はヒポクラテスの著作の全てを証拠として持ち出している。

この著作をアイユブがシリア語に翻訳した。そして、私は先に述べた諸著作と共に、明快さの限りをもって翻訳した。またこれをフバイシュがムハンマド・ブン・ムーサーのためにアラビア語に翻訳した。

28. 『エラシストラトスの解剖知識について』 (*Fī 'Ilm Arāsiṣṭrāṭus fī al-tashrīḥ*) [Sezgin, 101, no. 24; Ullmann, 54, no. 77]

この著作は三巻で作られた。彼はこれもまたボエトゥスのために、年齢が若い頃を書いた。これにおける彼の目的は、エラシストラトス (Erasistratus) がその著作の全てにおいて解剖について語ったことを解説し、そして正しいことの正しさ、誤っていることの誤りを説明することである。

私以前にこの著作を誰も翻訳していない。そこで私は、先に述べた私が翻訳した著作と共にシリア語に翻訳した。ただし、欠陥が多く最後が少し欠けている一つの写本としか会っておらず、それを洗練させるのに大変

な苦勞を伴った。しかし、理解できるものが生み出されたので、私の能力の限りにおいてガレノスによる内容から外れないように努めた。またこれをフバイシュガムハンマド・ブン・ムーサーのためにアラビア語に翻訳した。

29. 『リュコスが解剖に関して知らなかったことについて』 (*Fī-mā lam ya lam Lūqus min amr al-tashrīh*)

彼はこの著作を四巻で作ったと述べている。私はこれを見たことがなく、これを誰かが見たとも伝わっていない。

30. 『彼がリュコスと見解を異にすることについて』 (*Fī-mā khālaifa fī-hi Lūqus*) [*Adversus Lycum*, XVIII A 196-245; Sezgin, 134, no. 135]

彼が述べることによると、この著作は二巻で作られた。私はこれを見たことがなく、これを見た人を知らない。

31. 『子宮の解剖について』 (*Fī Tashrīh al-raḥim*) [*De Uteri dissectione*, II 887-908; Sezgin, 101, no. 26; Ullmann, 41, no. 14]

この著作は小さな一巻である。彼はこれをある助産婦のために年齢が若い頃に書いた。これには、子宮の解剖に関して必要なことの全てと、妊娠している時にそこに生じるものが [書かれている]。

この著作をアイユーブが翻訳した。そして私は、私が翻訳した他の解剖の諸著作と共にこれをシリア語に翻訳した。またフバイシュガムハンマド・ブン・ムーサーのためにアラビア語に翻訳した。

32. 『最初の椎骨と首の椎骨との関節について』 (*Fī Maḥsil al-faḡra al-ūlā min faḡār al-raḡaba*)

これは一巻である。

33. 『部分が等しい器官の違いについて』 (*Fī Ikhtilāf al-a‘dā’ al-mutashābihat al-ajzā’*) [Sezgin, 101, no. 25; Ullmann, 55, no. 80]

これは一巻である。

[これをフナインはこの著作 [『書簡』] の後で [シリア語に] 翻訳した。また彼の弟子イーサー・ブン・ヤフヤー (‘Isā ibn Yahyā)<sup>12</sup>がアラビア語に翻訳した。]<sup>13</sup>

34. 『発声器官の解剖について』 (*Fī Tashrīh ālāt al-ṣawt*)

この著作は一巻である。これはガレノスの言葉遣いを捏造しており、ガレノスによるものではなく、他の先人たちによるものでもない。そうではなく、最近の人々の誰かがガレノスの著作から編纂したものであり、それにもかかわらずその編纂者は浅薄である。

ユーハンナー・ブン・マーサワイヒがこれを翻訳するよう私に頼んだので、私はそれに応えた。だが私は、これを翻訳したのか、[誰かの翻訳を] 改善したのか覚えていない。とはいえ、私が可能な限り良く洗練させたことは知っている。

35. 『目の解剖について』 (*Fī Tashrīh al-‘ayn*) [Sezgin, 101, no. 27]

この著作もまた一巻である。この題名も偽物である。なぜなら、これはガレノスに帰されているが、ガレノスによるものではないからである。ルフォス (Rūfus)<sup>14</sup>かそれに劣る者によるというのが妥当である。

アイユーブがこの著作を翻訳した。私はそれをユーハンナー・ブン・マーサワイヒのために、助けを借りて洗練させた。

これらが、解剖に関して彼の真正な著作あるいは彼に帰せられた著作である。これらに続くのが、器官の機能と用途についての著作である。私はその記述を始めよう。ただし、それらのうち前もって述べられたものを除く。先行して述べられたものとは『自然の能力について』 [23] である。

36. 『胸と肺の動きについて』 (*Fī Ḥarakat al-ṣadr wa-l-ri'a*) [Sezgin, 134, no. 137; Ullmann, 55, 82]

この著作は3巻で作られた。これが執筆されたのは年齢が若い頃であり、彼がローマから最初に帰還して、スミュルナの街に滞在して、ペロプス (Pelops) のもとで学んでいたときの後である。それを彼に頼んだのは、彼と共に学んでいた或る人であった。彼は最初の二巻と第三巻の最初で、師であるペロプスからこの分野について受け継いだことを説明した。そして第三巻の残りで、彼 [自身が] 導き出したことを説明した。

私はこの著作をシリア語に翻訳しておらず、私以前にも誰も [翻訳していない]。しかし、イスタファン・ブン・バスイール (Iṣṭafan ibn Basil)<sup>15</sup> がムハンマド・ブン・ムーサーのためにアラビア語に翻訳した。そして、ムハンマド・ブン・ムーサーが私に校合を、また欠陥があればその改善を頼んだので、それを行った。そして、ユーハンナー・ブン・マーサワイヒがフバイシュに、彼のためにアラビア語からシリア語に翻訳するよう頼み、[フバイシュは] それを翻訳した。

37. 『呼吸の原因について』 (*Fī 'Ilal al-tanaffus*) [*De Causis respirationis*, IV 465-469; Sezgin, 102, no. 29; Ullmann, 55, no. 81]

この著作はローマへの最初の旅程の中で、ボエトゥスのために二巻で作られた。これにおける彼の目的は、呼吸がどのような器官から意識的に起こり、どのような [器官] から強制によって起こるかを説明することである。

アイユーブがこれを翻訳したが、理解できる翻訳ではない。また、イスタファンがムハンマド・ブン・ムーサーのためにアラビア語に翻訳した。ムハンマドはこれについて、先の著作 [36] で私に頼んだ者と同じように私に頼み、イスタファンに私との校合を命じた。それゆえ、私は理解しやすく率直で、その何れもおかしいと思われぬような言葉でシリア語版を

改善した。なぜなら、私は息子のために一つの版を作らなかったからである。またアラビア語版もそれと同様に「行った」とはいえ、それは元々シリア語版より大きく善いものであった。

38. 『声について』 (*Fī al-Ṣawt*) [Sezgin, 103, no. 30; Ullmann, 54, no. 79]

この著作は四巻で、先に述べた著作の後に作られた。これにおける彼の目的は、声がどのように起こるか、それがどのようなものであるか、その質料は何か、どのような道具によって生じるか、どのような器官がその発生を助けるか、声はどのように違うかを説明することである。

私はこの著作をシリア語に翻訳しておらず、私以前の者の誰も翻訳していない。しかし、私はこれを大臣ムハンマド・ブン・アブドゥルマリク (*Muḥammad ibn 'Abd al-Malik*)<sup>16</sup>のために二十年ほど前にアラビア語に翻訳し、この人物の理解の良さに応じて、それを極めて洗練させた。ムハンマドはこれを読んで、彼がより良いと思ったものに応じて多くの言葉を変更していた。そして、ムハンマド・ブン・ムーサーはこれと最初の版について考察し、最初の版を選んで、そちらを書き写した。両方の版が見つかったときにそれらの違いの理由をあなたが知れるように、このことを説明したいと思う。またユーハンナー・ブン・マーサワイヒがフバイシュにこの著作をアラビア語からシリア語に翻訳するよう頼み、彼はそれを翻訳した。

39. 『筋肉の動きについて』 (*Fī Harakat al-'adal*) [*De Motu musculorum*, IV 367-464; Sezgin, 103, no. 31; Ullmann, 41, no. 18]

この著作は二巻で作られた。これにおける彼の目的は、筋肉の動きは何か、その動きは一つだけであるにもかかわらずこれらの様々な動きが筋肉からどのように起こるのかを説明することである。彼はここで、息が意思による運動から起こるのか、自然な運動から起こるのかもまた研究し、この分野における多くの精緻なことを考究した。



この著作を私はシリア語に翻訳し、それについて誰も私に先行していない。またイスタファンがアラビア語に翻訳した。ムハンマド・ブン・ムーサーがそれをギリシア語と校合して改善するよう私に頼んだので、私は行った。

40. 『尿と血液の区別について信じられている誤りについて』 (*Fī I'tiqād al-khaṭa' alladhī u'tuqida fī tamyīz al-bawl min al-dam*)

この著作は一卷である。

私はギリシア語の写本を見つけたが、私には翻訳することはおろか、それを読むことすらできなかった。また私以外の誰もこれを翻訳していない。

41. 『脈拍の必要性について』 (*Fī al-Hāja ilā al-nabḍ*) [*De Usu pulsuum*, V 149-180; Sezgin, 104, no. 32; Ullmann, 41, no. 16]

この著作は一卷である。ここで彼は脈拍の用途を説明している。

私はこれをサルマワイヒ・ブン・ブナーン (Salmawayh ibn Bunān)<sup>17</sup>のためにシリア語に翻訳した。またフバイシュがこれを、『脈拍について』大著 [16] と共にアラビア語に翻訳した。[またイスハーク・ブン・フナインがその父の死後に翻訳した。]<sup>18</sup>

42. 『呼吸の必要性について』 (*Fī al-Hāja ilā al-tanaffus*) [*De Usu respirationis*, IV 470-511; Sezgin, 104, no. 33; Ullmann, 41, no. 17]

この著作も一卷である。ただしそれは大きい。ここで彼は呼吸の用途が何であるかを考究している。

私はこの著作がシリア語に翻訳されたとは知らない。アラビア語についてはイスタファンが翻訳した。私もこれの半分ほどをムハンマド・ブン・ムーサーのためにアラビア語に翻訳したが、その完成を妨げる出来事が起こった。そして、私の弟子であるイーサーがこれをシリア語に翻訳するよ

う私に頼んだので、それを引き受けた。

43. 『脈打つ血管には本性において血液が流れているか否かについて』 (*Fī al-'Urūq al-ḍawārib hal yajrī fī-hā al-dam bi-ṭaba' am lā*) [*An in Arteriis sanguis contineatur*, IV 703–736; Sezgin, 104, no. 34; Ullmann, 41, no. 19]

この著作も一巻である。これにおける彼の目的は、その題名に調和している。

私は少年であったときに、これをジブリールのためにシリア語に翻訳した。ただし、その正しさについて自信がなかった。なぜなら、その写本は一つで、誤りが多かったからである。そして、私はついにそれをシリア語に正確に翻訳した。またイーサー・ブン・ヤフヤーがアラビア語に翻訳した。

44. 『下剤の力について』 (*Fī Quwā al-adwiya al-mushila*) [*De purgantium medicamentorum facultate*, XI 323–342; Sezgin, 105, no. 35]

この著作も一巻である。ここで彼は、薬品が下すものを下すのはそれぞれの薬品が身体の中で遭遇するものをその本性に変容させて出すことによるのではなく、それぞれが自身に調和し類似する体液を吸引することであると説明した。

この巻をアイユブ・ルハーウィーがシリア語に翻訳した。私のもとにはギリシア語の写本があり、私はそれをシリア語に翻訳した。またイーサー・ブン・ヤフヤーがアラビア語に翻訳した。

45. 『習慣について』 (*Fī al-'Ādāt*) [Sezgin, 105, 36; Ullmann, 45, 37]

この著作は一巻である。これにおける彼の目的は、習慣は考察すべき附帯性の一つであると説明することである。

私はこの巻をサルマワイヒ・ブン・ブナーンのためにシリア語に翻訳し

た。この巻には、プラトンの言葉からガレノスが挙げた証言の注釈がプロクロス (Proclus) による解説と共に、またヒポクラテスの言葉から彼が挙げた「証言の」注釈がガレノスによる解説と共に続いている。またフバイシュがアフマド・ブン・ムーサーのためにアラビア語に翻訳した。

46. 『ヒポクラテスとプラトンの見解について』 (*Fī Ārā' Buqrāt wa-Aflājun*) [*De Placitis Hippocratis et Platonis*, V 181-805; Sezgin, 105, no. 37; Ullmann, 40, no. 12]

この著作は十巻で書かれた。これにおける彼の目的は、プラトンがヒポクラテスからそれらを受け継いでいるために、その言葉の大半においてヒポクラテスと調和していること、またアリストテレスは彼らと異なるところでは誤っていることを説明することである。彼はここで、思考 (*fikr*) と想像 (*tawahhum*) と記憶 (*dhikr*) を成り立たせる魂の統御的能力について必要となることの全て、身体の統御を成り立たせる能力がそこから送られる三つの根源について「必要となることの全て」、またその他の領域におけるこれら以外のことを説明している<sup>19</sup>。

この著作をアイユーブがシリア語に翻訳したが、これまで彼以外に誰もこれを翻訳していない。私のもとには数多くのギリシア語の写本があったが、私はそれ以外のもので忙しかった。そして、私はその後でこれをシリア語に翻訳し、ガレノスがこの著作の第七巻で語ったことに関して彼を擁護するために私が作成した巻を付け加えた。またフバイシュがムハンマド・ブン・ムーサーのためにアラビア語に翻訳した。

47. 『困難な運動について』 (*Fī al-Ḥarakāt al-mu'tāsa*) [Sezgin, 106, no. 38; Ullmann, 55, no. 85]

この著作は一巻である。これにおける彼の目的は、彼と彼以前の者が知らなかったが、その後で知った運動について説明することである。

これをアイユーブが翻訳した。私のもとにこの著作の写本があったが、過去には翻訳しなかった。そして、その後でシリア語に翻訳した。そして、ムハンマド・ブン・ムーサーのためにアラビア語に翻訳した。

48. 『嗅覚の器官について』 (*Fī Ālat al-shamm*) [*De Instrumento odoratus*, II 857-886; Sezgin, 106, no. 39; Ullmann, 41, no. 17]

この著作も一巻である。

私のもとにギリシア語の写本があったが、それを読む暇がなかった。そして、これをシリア語に翻訳した。[そして、イスハーク・ブン・フナインがアラビア語に翻訳した。]<sup>20</sup>

49. 『諸器官の用途について』 (*Fī Manāfi' al-a'ḍā'*) [*De Usu partium*, III 1-933, IV 1-336; Sezgin, 106, no. 40; Ullmann, 41, no. 15]

この著作は十七巻で作られた。彼はその第一巻と第二巻で、手の造りを完璧にしたことにおける造物主 (bāri') の叡智を説明した。第三巻では足の造りを完璧にしたことにおけるその叡智を、第四巻と第五巻では栄養の道具におけるその叡智を、第六巻と第七巻では呼吸の道具について、第八巻と第九巻では頭にあるものについて、第十巻では両目について、第十一巻では顔にある残りのものについて、第十二巻では背骨周りと同肩を説明した。そして、これらの後の二巻では生殖の器官を、[第十五巻ではそれらの中にあるものとそれらの後にあるものに関係する議論を、]<sup>21</sup>第十六巻では身体全体に共通の道具、つまり脈打つ血管と脈打たない血管と神経について説明した。第十七巻では全ての器官の状態と大きさを説明し、この著作全体の用途を説明した。

この著作をセルギオス<sup>22</sup>がシリア語に翻訳したが、質の悪い翻訳である。私はこれをサルマワイヒのためにシリア語に翻訳した。またフバイシュがムハンマドのためにアラビア語に翻訳し、私が何巻かを校閲してその欠陥

を改善し、[現在] 残りの改善をしている。[フナインはこれを語った後で、この著作の第十七巻をアラビア語に翻訳した。]<sup>23</sup>

これらの著作は、『治療について』を読む前に読む必要がある著作に続くものである。私はこれらの著作の一部を、[それらについて] 述べたところで既に述べた。そのうちには、『元素について』[11]、『混質について』[12]、『原因と症状について』[14]、『体内器官の病気を知ることについて』[15]、『発熱の種類について』[17]、『[医]術』[4]がある。また予後に関する著作には、『分利について』[18]、『分利の日について』[19]、『脈拍について』の小著[5]と大著[16]がある。私はそれらの著作のうち、これらの後に残るものを述べていこう。

50. 『身体之最良の構造について』 (*Fī Afḍal hay'āt al-badan*) [*De Optima corporis nostri constitutione*, IV 737-749; Sezgin, 108, no. 41; Ullmann, 39, no. 8]

この著作は一巻であり、『混質について』[12]の最初の二巻に続くものである。これにおける彼の目的はその題名から明らかである。

私はこの著作を我が息子のためにシリア語に翻訳した。またアブー・ハサン・アリー・ブン・ヤフヤー (Abū al-Ḥasan 'Alī ibn Yahyā)<sup>24</sup>のためにアラビア語に翻訳した。

51. 『肥沃な身体について』 (*Fī Khiṣb al-badan*) [*De Bono habitu*, IV 750-756; Sezgin, 108, no. 42; Ullmann, 40, no. 9]

この著作は小さな一巻である。これにおける彼の目的はその題名から明らかである。

私はこれを前の巻[50]と共にシリア語に翻訳した。アリー・ブン・ヤフヤーにこれをアラビア語に翻訳するよう頼まれたが、私はそれが可能だとは思っていない。またフバイシュがこれをアブー・ハサン・アフマド・

ブン・ムーサー<sup>25</sup>のためにアラビア語に翻訳した。

52. 『様々な混質の悪化について』 (*Fī Sū' al-mizāj al-mukhtalif*) [*De Inaequali intemperie*, VII 733-752; Sezgin, 108, no. 43; Ullmann, 39, no. 7]

この著作もまた一巻である。これにおける彼の目的はその題名から明らかである。これにおいて彼は、どの種類の混質の悪化が身体全体において等しく、その状態はどのようなものか、またどの種類の混質の悪化が身体の器官において異なるのかを述べた。

これをアイユーブが翻訳した。私のもとにギリシア語の写本はあったが、後までそれを読む暇がなかった。そして、私はそれをアブー・ハサン・アフマド・ブン・ムーサーのためにアラビア語に翻訳した。

53. 『単独薬品について』 (*Fī al-Adwiya al-mufrada*) [*De Simplicium medicamentorum temperamentis ac facultatibus*, XI 369-892, XII 1-377; Sezgin, 109, no. 44; Ullmann, 47, no. 49]

この著作をガレノスは十一巻で作った。説明した通り、これは『混質について』[12]の第三巻に続くものである。彼は最初の二巻で、薬品の力を判断するときに辿られる不適切な道において誤った者の誤りを露わにした。そして第三巻では、薬品の一次的な力の判断についての知識全体にとって正しい原則を立てた。そして第四巻では二次的な力、つまり味や匂いについて説明し、それらのうち薬品の一次的な力を示すものを告げた。第五巻では薬品の三次的な力、つまり加熱、冷却、乾燥、加湿といったそれらの身体における作用を説明した。そしてこれに続く三巻〔第六巻から第八巻〕では、植物の部分である薬品それぞれの力を説明した。そして第九巻では、大地の部分である薬品、つまり土や粘土、石や鉱物といった種類の力を〔説明した〕。そして第十巻では、動物の身体に生まれるものからの薬品の力を〔説明した〕。そして第十一巻では、海と塩水の中で生まれる

ものからの薬品の力を説明した。

第一部つまり〔最初の〕五巻をユースフ・フーリー（Yūsuf al-Khūrī）<sup>26</sup>がシリア語に翻訳したが、有害で質の悪い翻訳である。そして後にアイユーブがこれを翻訳し、ユースフが翻訳したものより改善させたが、然るべく洗練されてはいなかった。そして私はこれをサルマワイヒのためにシリア語に翻訳し、極めて洗練させた。この著作の第二部をセルギオスが翻訳した。ユーハンナー・ブン・マーサワイヒが私にこの著作の第二部の校合と改善を頼んだので、それを〔改めて〕翻訳するのが最善であったが、それを行った。この著作をフバイシュがアフマド・ブン・ムーサーのためにアラビア語に翻訳した。〔フナインはこの言葉の後で〔この〕著作をシリア語で要約し、最初の五巻をアリー・ブン・ヤフヤーのために翻訳した。〕<sup>27</sup>

54. 『目の疾患の徴候について』（*Fī Dalā'il 'ilal al-'ayn*） [Sezgin, 102, no. 28; Ullmann, 56, no. 87]

この著作は一巻である。彼はこの著作を若い頃に眼科医の少年のために書いた。これにおいて彼は、目の膜それぞれに起こる疾患を要約し、その徴候を説明した。

この著作をセルギオスがシリア語に翻訳した。そのギリシア語の写本は私のもとにあったが、それを翻訳する暇がなかった。

55. 『病気の時期について』（*Fī Awqāt al-amrād*） [De Morborum temporibus, VII 406-439; Sezgin, 110, no. 45; Ullmann, 42, no. 23]

この著作もまた一巻である。これにおいて彼は、病気の四つの時期、つまり初期、増大期、絶頂期、鎮静期を説明した。

この著作をアイユーブが翻訳した。そのギリシア語の写本は私のもとにあったが、それを翻訳する暇がなかった。そして私はそれをシリア語に翻訳した。これをイーサー・ブン・ヤフヤーがアラビア語に翻訳した。

56. 『充満について』 (*Fī al-Imtilā'*) [*De Plenitudine*, VII 513-583; Sezgin, 111, no. 46; Ullmann, 43, no. 26]

この著作もまた一巻である。これにおいて彼は体液の過多を説明し、それを種類に分け、その種類それぞれの徴候を説明した。

私はこれを最近プフティーシューウのために、私が翻訳において習慣的に用いる言葉のように、シリア語に翻訳した。これは私にとって最も極まり、最も生き生きとして、最もギリシア語に近いが、シリア語の法則を破っていない言葉である。そしてプフティーシューウが、最初の言葉より易しく滑らかで受け容れられる言葉でやり直すよう頼んだので、これを行った。この書物をイスタファンがアラビア語に翻訳したが、私はそれを検討していない。

57. 『腫瘍について』 (*Fī al-Awrām*) [*De Tumoribus praeter naturam*, VII 705-732; Sezgin, 111, no. 47; Ullmann, 43, no. 28]

この著作もまた一巻である。ガレノスはそれを、自然 [状態] から外れた腫瘍 (*ghalaz*) の種類によって記述した。これにおいて彼は腫瘍の種類とその徴候を説明した。

私はこの著作の梗概を区分の方法によって作成し、さらにその全体から抽出した十巻を [作成した]。これをアイユーブが翻訳したと思う。イブラーヒーム・ブン・サルト (*Ibrāhīm ibn al-Ṣalt*)<sup>28</sup> がアブー・ハサン・アフマド・ブン・ムーサーのためにアラビア語に翻訳した。[この後で、フバイシュの翻訳によるその写本が発見された。]<sup>29</sup>

58. 『始原の原因、つまり身体の外から生じる最初のものについて』 (*Fī al-Asbāb al-bādi'a wa-hiya al-awwal allatī taḥduthu min khārij al-badan*) [Sezgin, 135, no. 138; Ullmann, 57, no. 91]

この著作は一巻である。これにおいてガレノスは、始原の原因は身体へ



働きかけることを説明し、その働きを否定する者の言葉を論駁している。

これをアイユーブが翻訳した。そのギリシア語の写本は私のもとにあったが、それを翻訳する暇がなかった。

59. 『病氣と結合した原因について』 (*Fī al-Asbāb al-muttaṣila bi-l-maraḍ*) [Sezgin, 131, no. 124; Ullmann, 58, no. 92]

これは一巻である。これにおいて彼は病氣と結合してそれを作り出す原因を述べた。

これについての話は、先の巻 [58] についての話と同様である。

60. 『身震い、悪寒、震え、痙攣について』 (*Fī al-Ri'sha wa-l-nāfiḍ wa-l-ikhtilāḥ wa-l-tashannuḥ*) [*De tremore, palpitatione, convulsione et rigore*, VII 584-642; Sezgin, 135, no. 139]

この著作についての話は先のもの [58-59] についての話と同様である。

私は [かつて] これを半分ほどシリア語に翻訳し、そしてそれを完成させた。フバイシュがアラビア語に翻訳した。

61. 『医学の部分について』 (*Fī Ajzā' al-ṭibb*) [Sezgin, 112, no. 49; Ullmann, 52, no. 69]

この著作もまた一巻である。これにおいて彼は医学を様々な区分方法で区分している。

私はこの著作をファイユームとして知られるアリー ('Alī al-Fayyūm)<sup>30</sup> という人物のためにシリア語に翻訳した。[フナインは亡くなる二ヶ月ほど前にこの著作の半分以上をアラビア語に翻訳し、その息子イスハークがそれを完成させた。]<sup>31</sup>

62. 『精液について』 (*Fī al-Minā*) [*De semine*, IV 512-651; Sezgin, 113,

no. 50; Ullmann, 41, no. 20]

この著作は二巻である。これにおける彼の目的は、身体全ての器官がそこから生まれるところのものはアリストテレスが考えたように血液ではないこと、全ての根本的器官<sup>32</sup>が生まれるのは精液からであり、それらは白い器官であること、血液から生まれるものは赤い肉のみであることを説明することである。

私はこの著作をサルマワイヒのためにシリア語に翻訳し、アフマド・ブン・ムーサーのためにアラビア語に翻訳した。

63. 『七ヶ月での胎児の誕生について』 (*Fī Tawallud al-janīn al-mawlūd li-sab‘a ashhur*) [Sezgin, 113, no. 51; Ullmann, 55, no. 83]

この著作は一巻である。

私のもとにその写本はあったが、翻訳することはおろか、然るべく読むことができなかつた。それでも、それは美しく、優雅で、大いに役立つものであった。そして後に私はこれをシリア語とアラビア語に翻訳した。

64. 『黒胆汁について』 (*Fī al-Mirra al-sawdā’*) [*De Atra bile*, V 104-148; Ullmann, 40, no. 10]

この著作もまた一巻である。これにおいて彼は黒胆汁の種類とその兆候を説明している。

これを最近アイユーブがブフティーシューウ・ブン・ジブリール (*Bukhtīshū’ ibn Jibrīl*)<sup>33</sup>のために翻訳した。そして、イスタファンがムハンマド・ブン・ムーサーのためにアラビア語に翻訳し、私も翻訳した。[これもまた彼自ら要約し、イーサーが翻訳したものの一つである。]<sup>34</sup>

65. 『発熱の周期と複合について』 (*Fī Adwār al-hummayāt wa-tarākibi-hā*) [*Adversus eos qui de typhis scripserunt*, VII 475-512; Sezgin, 114, no. 53;

Ullmann, 42, no. 25]

この著作は一卷である。これにおいて彼は、発熱の周期とその複合について誤ったことを主張している人々を論駁している。

私のもとにそのギリシア語の写本はあったが、それをシリア語に翻訳することができなかった。そして後に私はそれを翻訳した。

ガレノスにとってこの著作の題名は『類型について語る者への論駁』(*Munāqaḍat man takallama fī al-rusūm*) である。この分野についてガレノスに帰せられた別の巻が発見されたが、彼によるものではない。

予見に関して執筆された彼の著作のうち、『分利について』[18]と『分利の日について』[19]、『脈拍について小著』[5]と『脈拍について大著』[16]——これらについては先に述べた——の後に、私が[これから]述べ始める著作が残っている。

#### 66. 『脈拍について大著の梗概』 (*Jumlat kitābi-hi al-kabīr fī al-nabḍ*)

ガレノスは自身の『脈拍について』の大著を一卷にまとめたと述べた。私はこのようなものを含むギリシア語の巻を見たが、ガレノス自身がこの巻の執筆者だとは信じていない。なぜなら、これは脈拍について必要となる全てのことを含んでおらず、著述の美しさも[彼のものでは]ないからである。ガレノスがそのような巻の執筆を約束したがそれを執筆できず、ある剽窃者が彼によって約束されたが未遂であることを発見してその巻の執筆を偽装し、それが真作とされるように[ガレノス著作の]目録にその記述を挿入したというのはあり得ることである。あるいはガレノスがそれについて、これではない巻を執筆したが、彼の著作の多くが散逸したように散逸してしまい、これがその代わりに捏造されたというのもあり得ることである。

これをセルギオスがシリア語に翻訳した。

67. 『脈拍についてアルキゲネスへの論駁』 (*Fī al-Nabḍ yunāqīdu Arkhijānis*) [Sezgin, 135, no. 140]

この著作をガレノスは八巻で作ったと述べた。

この著作はこれまで翻訳されておらず、私はそのギリシア語の写本を見たことがない。ただし、人々がそれをアレppoで見たと告げた情報に頼って私はそこで細心に探求したが、入手することができなかった。

この著作における彼の目的は、彼が述べる通りでは、アルキゲネス (Archigenes) がその『脈拍について』で語ったことを解説し、その誤りに対して真理を明らかにすることである。

その写本はムハンマド・ブン・ムーサーのもとに届いた。

68. 『呼吸の悪化について』 (*Fī Radā't al-tanaffus*) [*De Difficultate respirationis*, VII 753-960; Sezgin, 114, no. 54; Ullmann, 44, no. 33]

この著作は三巻で作られた。これにおける彼の目的は、悪い呼吸の種類、その原因、それが示すものを説明することである。その第一巻で呼吸の種類とその原因を述べ、第二巻では呼吸の悪化の種類と、それぞれの種類が示すものを [述べ]、第三巻では彼自身の議論の正しさの証拠となるヒポクラテスの言葉を持ち出している。

これをアイユーブがシリア語に翻訳した。私はそれをギリシア語と校合し、我が息子のために改善した。またアブー・ジャアファル・ムハンマド・ブン・ムーサーのためにアラビア語に翻訳した。

69. 『予後に関する逸話について』 (*Fī Nawādir taqdimat al-ma'rifa*) [*De Praenotione ad epigenem*, XIV 599-673; Sezgin, 114, no. 55; Ullmann, 44, no. 34]

この著作は一巻である。これにおいて彼は予後 [診断] を奨励し、それを導く精緻な方法を教えた。また彼が病人について先に知り、それを告げ

て驚かれたという不思議な事例を説明した。

これをアイユーブがシリア語に翻訳した。私のもとにそのギリシア語の写本はあったが、それを翻訳する暇がなかった。そして私はシリア語に翻訳した。またイーサー・ブン・ヤフヤーがアブー・ハサンのために翻訳し、私が満足する翻訳であった。[彼は少しを除いてこれを底本と校合し、後にその息子イスハークがその校合を完了させた。]

70. 『治療方法について』[20]を要約したもの』(*Alladhī ikhtaṣara fī-hi kitāb-hu fī Ḥīlat al-bur*<sup>1)</sup>) [Sezgin, 115, no. 56; Ullmann, 59, no. 96]

この著作は二巻である。

これをイブラーヒーム・ブン・サルトがシリア語に翻訳した。

71. 『瀉血について』(*Fī al-Faṣd*) [*De Venae sectione*, XIX 519–528; Sezgin, 115, no. 57; Ullmann, 59, no. 97]

この著作は三巻で作られた。その第一巻で彼はエラシストラトスの論駁を意図した。なぜなら、[エラシストラトス]は瀉血を禁じていたからである。第二巻ではローマにいるエラシストラトスの仲間たちをこれと同じ主旨で論駁した。第三巻では瀉血による治療と彼自身が考えていたことを説明した。

この著作をセルギオスがシリア語に翻訳した。最後の巻をアラビア語に翻訳したのはイスタファンである。私のもとにその写本はあったが、それを翻訳する暇がなかった。そして私は第三巻<sup>35</sup>をイーサーのためにシリア語に翻訳し、イーサーがアラビア語に翻訳した。

72. 『衰弱について』(*Fī al-Dhubūl*) [*De Marcore*, VII 666–704; Sezgin, 116, no. 58; Ullmann, 43, no. 27]

この著作は一巻である。これにおける彼の目的は、この病気の本性とそ

の種類、それが差し迫った者に適した処方の説明することである。

これをアイユーブが翻訳したと私は思う。私は区分の方法によってその集成を、別の数巻と共に作り出した。またイスタファンがアラビア語に翻訳した。私はアブー・ジャアファルが気づき、その[改善]頼んできた幾つかの箇所を改善したが、その改善を完了させられなかった。そして私はシリア語に翻訳し、イーサーがアラビア語に翻訳した。

73. 『てんかんの少年の処方について』 (*Fī Ṣifāt li-ṣabīy yuṣra' u*) [*Puero epileptico consilium*, XI 357-378; Sezgin, 116, no. 59; Ullmann, 46, no. 43]

この著作もまた一卷である。

私のもとにその写本はあったが、それを翻訳することができなかった。イブラーヒーム・ブン・サルトがシリア語とアラビア語に翻訳した。

74. 『栄養物の力について』 (*Fī Quwā al-aghdhīya*) [*De Alimentorum facultatibus*, VI 453-748; Sezgin, 117, no. 60; Ullmann, 47, no. 45]

この著作は三巻で作られた。これにおいて彼は食物と飲物のうち栄養するものの全てを数え上げ、それぞれにある力を説明した。

これをセルギオスが翻訳し、そしてアイユーブが[翻訳した]。私はかつてサルマワイヒのために正しくない写本から翻訳した。そしてその後、我が息子のためにその写本を気にかけておき、私のもとにその数点の写本がギリシア語で集まったので、それと校合し、訂正した。私はその梗概をシリア語で抽出し、多くの先人がこの分野について語ったことについての数巻を共に付け加え、三巻にまとめた。またそれをイスハーク・ブン・イブラーヒーム・ターヒリー (Ishāq ibn Ibrāhīm al-Ṭāhīrī)<sup>36</sup>のためにアラビア語に翻訳した。そしてフバイシュは『栄養物の書』をムハンマド・ブン・ムーサーのためにアラビア語に完全に翻訳した。

75. 『痩せる処方について』 (*Fī al-Tadbīr al-mulaṭṭif*) [Sezgin, 117, no. 61; Ullmann, 47, no. 47]

この著作は一巻である。これにおける彼の目的はその題名に調和している。

私はこれをユーハンナー・ブン・マーサワイヒのためにシリア語に翻訳した。またイスハーク・ブン・スライマーン (Ishāq ibn Sulaymān)<sup>37</sup>のためにアラビア語に翻訳した。[これもまたフナインが要約し、イーサー・ブン・ヤフヤーが翻訳したものの一つである。]<sup>38</sup>

76. 『良質と悪質の糜汁について』 (*Fī al-Kaymūs al-jayyid wa-l-radī*) [*De Bonis malisque sucis*, VI 749–815; Sezgin, 118, no. 62; Ullmann, 47, no. 46]

この著作もまた一巻である。これにおいて彼は栄養物を説明し、またどれが称讃される糜汁を生み、どれが悪質な糜汁を生むかを説明している。

これをセルギオスが翻訳した。そして私は『食物の書』 (*Kitāb al-Aṭ'ima*)<sup>39</sup>と共に翻訳し、それと共に訂正した。サービト・ブン・クッラ (Thābit ibn Qurra)<sup>40</sup>がアラビア語に翻訳し、フバイシュがアブー・ハサン・アフマド・ブン・ムーサーのために翻訳した。シャムリー (Shamli)<sup>41</sup>もまた翻訳した。

77. 『病気の治療に関するエラシストラトスの思考について』 (*Fī Afkār Arasisṭrāṭus fī mudāwāt al-amrād*) [Sezgin, 136, no. 141]

この著作は八巻で作られた。これにおいて彼はエラシストラトスが治療において辿った道を伝え、その正しいものと誤ったものを区別した。

これまでこの著作を誰も翻訳していない。そのギリシア語の写本は私の蔵書にあった。そして我が息子のイスハークがブフティエーシューウのためにシリア語に翻訳した。

78. 『ヒポクラテスの見解による急性病の処方について』 (*Fī Tadbīr al-amrāḍ al-hādda 'alā ra'y Buqrāṭ*) [*De Diaeta in morbis acutis secundum Hippocratem*, XIX 182–221; Sezgin, 118, no. 63; Ullmann, 59, no. 100]

この著作は一卷である。これにおける彼の目的は題名から知られる。

私はこれを最近ブフティーシューウのためにシリア語に翻訳し、その後でムハンマド・ブン・ムーサーのためにアラビア語に翻訳した。

[翻訳(3)へ続く]

本研究はJSPS科研費JP22K13027の支援を受けたものである。

#### 注

- 1 本稿は「9世紀バグダードのガレノス研究：フナイン・ブン・イスハーク『ガレノス著作の翻訳についての書簡』翻訳(1)」『専修人文論集』109号(2021)、209–234頁の続きである。
- 2 Cf. G. Strohmaier, “Hunayn b. Ishāq,” *Encyclopaedia of Islam*, THREE, 2017–3, 76–83. E. Savage-Smith, S. Swain and G. J. van Gelder, *A Literary History of Medicine: The 'Uyūn al-anbā' fi ṭabaqāt al-aṭibbā' of Ibn Abī Uṣaybi'a* (Leiden: Brill, 2020) [以下, IAU], vol. 2–1, 464–497, 507; vol. 3–1, 491–531, 541[8.29, 9.2].
- 3 G. Bergsträsser, *Hunayn ibn Ishāq: über die syrischen und arabischen Galen-Übersetzungen* (Leipzig: Brockhaus, 1925); *Neue Materialien zu Hunain ibn Ishāq's Galen-Bibliographie* (Leipzig: Brockhaus, 1932). これらを含む『書簡』の校訂版については、「9世紀バグダードのガレノス研究(1)」を参照せよ。
- 4 ギリシア語については第9巻冒頭部分までのみ現存する。
- 5 以下、参照の便のために番号を振る。キューン版全集 (C. G. Kühn, *Claudii Galeni opera omnia*, 20 vols. [Lipsiae: Cnoblochii, 1821–33]) に該当する著作が現存する場合はその著作名(慣例に倣ってラテン語)とその箇所(収録巻[ローマ数字]および頁数)と、また F. Sezgin, *Geschichte des arabischen Schrifttums: Band III, Medizin- Pharmazie, Zoologie- Tierheilkunde, bis ca. 430 H.* (Leiden: E. J. Brill, 1970) および M. Ullmann, *Medizin im Islam* (Leiden: E. J. Brill, 1970) の参照箇所を記載する。
- 6 835年頃没。エデッサのヨブ (Job of Edessa) として知られる東方キリスト教徒の翻訳者で、36点のガレノス著作をシリア語に翻訳した。翻訳以外にも、自然哲学に関する著作を遺している。IAU, vol. 2–1, 512; vol. 3–1, 547[9.25].



- 7 828年没。東方キリスト教徒で、医者の名家プフティーシューウ家の一人である。何人かのカリフに医者として仕え、自身も医学書を執筆した。フナインにとって早期からの支援者である。プフティーシューウ・ブン・ジブリール（注33）の父親である。IAU, vol. 2-1, 345-367; vol. 3-1, 344-370[8.3].
- 8 857年没。何人かのカリフに仕えた医者で、フナインの師である。彼の医学の弟子であったフナインは、仲違いのために追放された後でギリシア語を習得して戻ってきて、彼にその実力を認められたという。IAU, vol. 2-1, 445-461; vol. 3-1, 465-487 [8.26].
- 9 XIX 25-30. キューン版では当該の記述の途中で欠落がある。この部分は後に発見された写本から補われた（V. Boudon-Millot, *Galien: Tome 1* [Paris: Les Belles Lettres, 2007], 147-153, esp. 152n4）。
- 10 9世紀末に没。フナインの甥で弟子である。Cf. G. Strohmaier, "Hubaysh b. al-Hasan al-Dimashqī," *Encyclopaedia of Islam, THREE*, 2017-4, 115f. IAU, vol. 2-1, 501f., 508; vol. 3-1, 535, 542[8.31, 9.4].
- 11 873年没。九世紀に科学の支援者として名声を博したバヌー・ムーサー家（ムーサー・ブン・シャーキルの息子たち）三兄弟の一人である。
- 12 没年不明。フナインの弟子の一人である。IAU, vol. 2-1, 505, 508; vol. 3-1, 539, 542 [8.35, 9.5].
- 13 後代の追記である。
- 14 エフェソスのルフォス（Rufus of Ephesus）として知られる人物で、おそらくトラヤヌス帝（在位98-117年）の時代に活動していた医学者である。
- 15 910年頃没。フナインの弟子の一人である。IAU, vol. 2-1, 511; vol. 3-1, 545[9.19].
- 16 847年没。イブン・ザイヤート（Ibn al-Zayyāt）として知られる。アッバース朝カリフ・ムウタスィム（第8代、在位833-842）およびワースィク（第9代、在位842-847年）の時代に大臣を務め、多数の翻訳者を支援した。IAU, vol. 2-1, 517; vol. 3-1, 554f. [9.49].
- 17 840/1年没。アッバース朝カリフ・ムウタスィムの侍医で、自身も医学書を執筆した。IAU, vol. 2-1, 423-433; vol. 3-1, 438-451[8.20].
- 18 後代の追記である。
- 19 魂の統御的能力とは魂の能力のうち思考と想像と記憶を司る精神的能力に当たり、ここで言われる「三つの根源」は脳と心臓と肝臓を指す。アリストテレスなどが魂の能力の根源を心臓と考えたのに対し、ガレノスはプラトンと同様に魂の三種類の能力がそれぞれ別の場所を根源としていると主張している。
- 20 後代の追記である。
- 21 A写本とB写本に共通しておらず、『書簡』を引用するイブン・アビー・ウサイビア（Ibn Abī Uṣaybi'a, 1270年没）も伝えていないため、Bergsträsserは後代の追記と推定している（*Neue Materialien*, 43）。この著作の現在伝わる構成では、第十一巻が顔、第十二巻が頭と背骨、第十三巻が背骨と肩、第十四巻と第十五巻が生殖器官を扱って

- いるため、「これらの後の二巻」は第十四巻と第十五巻を指していたと考えられる。そのため、ここで第十五巻の情報を追記するのは誤りである。この混乱した記述の原因として、アラビア語では「第十二巻」(al-maqāla al-thāniyat 'ashra) と「第十三巻」(al-maqāla al-thālithat 'ashra) の表記が混同されやすいことが指摘されよう。
- 22 536年没。東方キリスト教徒で、ガレノスやアリストテレスの著作をシリア語に翻訳した人物である。彼らの著作のうち必須書全ての翻訳を企てていたと考えられる。IAU, vol. 2-1, 512; vol. 3-1, 547 [9.24].
- 23 後代の追記である。
- 24 888/9年没。ムタワツキル(第10代, 在位847-861年)以降のアッパース朝カリフに仕えた人物である。フナインたち翻訳者を支援し、豊富な蔵書を持っていたと言われる。『書簡』の依頼者である。
- 25 九世紀に科学の支援者として名声を博したバヌー・ムーサー家三兄弟の一人である。
- 26 912年没。キリスト教徒の聖職者(khūrī)で、バヌー・ムーサー家に雇われた翻訳者である。IAU, vol. 2-1, 512; vol. 3-1, 547 [9.26].
- 27 後代の追記である。
- 28 詳細不明。東方キリスト教徒の翻訳者である。IAU, vol. 2-1, 512; vol. 3-1, 548 [9.27].
- 29 後代の追記である。
- 30 エジプトのファイユームの統治者で、翻訳者たちを支援した。IAU, vol. 2-1, 516; vol. 3-1, 553 [9.45].
- 31 後代の追記である。
- 32 根本的器官は身体の中にある液状のもの以外の、固さや安定性をもつ器官を指す。
- 33 870年没。東方キリスト教徒で、医者の名家ブフティーシューウ家の一人である。何人かのカリフに医者として仕え、自身も医学書を執筆した。ジブリール・ブン・ブフティーシューウ(注7)の息子である。IAU, vol. 2-1, 367-382; vol. 3-1, 370-384 [8.4].
- 34 後代の追記である。
- 35 修正された読みを採用した。修正前の読みでは「第二巻」である。
- 36 850年没。アッパース朝カリフ・マアムーン(第7代, 在位813-833年)からムタワツキルの時代に警察・軍事的役職に就いた人物である。
- 37 詳細不明。イサーク・イスラエリ(Isaac Israeli, 932/955年没)というユダヤ教徒の医者と同名だが、おそらく別人である。
- 38 後代の追記である。
- 39 『栄養物の力について』[74]の別名である。
- 40 901年没。サービア教徒の学者で、翻訳以外にも医学や数学や天文学の分野に著作を残した人物である。IAU, vol. 2-1, 548, 593-610; vol. 3-1, 513, 550-565 [9.28, 10.3].
- 41 詳細不明。医者として活躍し、医学書やアリストテレスの『形而上学』を翻訳したとされる。